

ラグビー部の胴上げで祝福される受験生



337人 春つかみ笑顔

小樽商科大で前期合格発表

小樽商科大は6日、2019年度前期日程の合格者を発表した。337人が喜びの春をつかんだ。

午前10時、大学構内で掲示板に合格者の受験番号が書かれた紙が張り出されると、受験生は「よし」「あった」などと喜んだ。学生たちは受験生に「おめでとう」と声をかけた。このうち応援団は「合格オメデトウ」と書いた紙を持ってエールを送り、ラグビー部は

胴上げで祝福した。

合格した小樽潮陵高3年の青山凌大さん(18)は「ずっと勉強してきた成果が出てほっとしている。いろいろなことに挑戦しながら学生生活を充実させたい」と抱負を語った。

同大によると、合格者の内訳は昼間コースが302人、夜間コースが30人、専門学科・総合学科卒業生入試が5人。昼間コースの現役生の比率は82・8%と、

前年度と比べて6割増加した。後期日程の合格発表は20日。(谷本雄也)

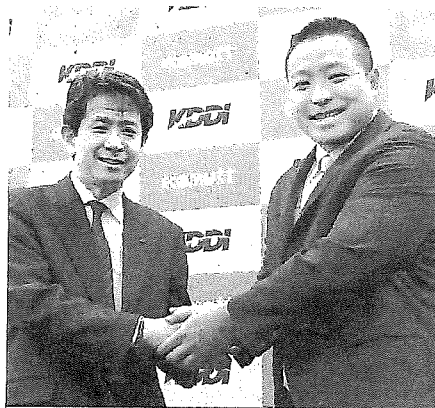
我が社の ストラテジー

東証マザーズに上場し「道産子ベンチャー」として注目を集めるエコモット。あらゆるモノがネットにつながる「IoT」をテコに、顧客の課題を掘り起しして解決する商品開発力が強みだ。1月にはKDDIと資本業務提携を締結。IoT市場の競争が激しくなるなかで、次世代通信規格「5G」の普及を見据え、自社製品の開発スピードを加速させる。

KDDIは1月末、エコモットの主要株主だった燃料販売業のしなねん商事(札幌市)などからエコモット株を取得した。第三者割当増資も実施し持ち株比率を21%に高め、エコモット創業者の入沢拓也社長に次ぐ第

エコモット

5G時代見据え開発加速



提携を発表したKDDIの原田ビジネスIoT企画部長(左)とエコモットの入沢社長

2位の株主になった。エコモットの強みはセンサーやカメラなどの先資を受け入れたのは、5G時代にIoT市場で製品開発の「羅針盤」を得るのが狙いだ。

同社は2007年設立で、当初は融雪を効率化する「ゆりもつと」が主力製品だった。積雪を感じずるセンサーだけでなく、インターネット接続した小型カメラを設置。管理者が実際の様子を確認しながら融雪装置の動作や停止を遠隔操作できるようにした。無駄な燃料使用を防ぎ、燃料コストを半分に抑えた。

建設現場の安全確保や運転モニタリング、防災分野などに進出した。IoT市場が爆発的に広がる5G時代になると、ベンチャーがヒット製品を次々と生み出すには限界がある。そこでIoTを活用しようとする企業が、技術からサービスを一通貫している通信大手と手を組んで

KDDIと提携で「羅針盤」

いる動きに着目。従来より取り引があったKDDIと組むことにした。自社IoT機器をKDDIが業界随一だ」と評価する。販路で展開できるほか

「事業化のためのシーズをいち早く手に入れることができるようになる」と(入沢社長)という。

KDDIにとっても提携の意義は大きい。IoTはヒトの勤や経験に頼っていた現場作業をセンサーで数値化し、効率化につなげる技術だ。肝となるのは、多種多様なセンサーを組み合わせてデータを収集する際の目利き力。KDDIの原田圭悟ビジネスIoT企画部長は「2千種類以上のセンサーを駆使したり、顧客が持つ既存センサーをネットワークにつないだりする知見はエコモットの強み」と評価する。

両社の提携を市場は好んでいる。1月15日に提携を発表すると、エコモット株は収益拡大を見込んだ買いが集まり、16日にはストップ高になった。1月23日に上場来高値(20023円)をつけ、足元では1850円前後で推移している。

来期以降、提携の果実を市場に見せなければ、期待は失望に変わる。エコモットの技術・商品開発には、これまで以上に注目が集まっている。(山中博文)

▼5G 大容量のデータを瞬時にやりとりできる第5世代の通信規格。速度は現在の第4世代の約100倍だ。1平方キロ当たり100万台と大量の端末と同時につながるため、あらゆるモノがネットにつながるIoT市場が広がる。自動運転や遠隔医療といった分野での活用が期待できる。5Gの商用化に向けて通信会社は基地局の刷新を進める。5G仕様の基地局機器は中国勢の華為技術(ファーウェイ)などが優勢だったものの、米政府が安全保障上の理由で中国製品を排除するといった逆風が吹いている。

キーワード

IoT市場が爆発的に広がる5G時代になると、ベンチャーがヒット製品を次々と生み出すには限界がある。そこでIoTを活用しようとする企業が、技術からサービスを一通貫している通信大手と手を組んで

※入沢氏は小樽商科大学ビジネススクール卒業生です。